「今、ここ」から考える社会学（1）

①私は、毎日大学に向かう電車の中で、常に「驚いて」います。通勤通学ラッシュの中、大半の人が黙々とスマホ画面を眺め、指を忙しそうに滑らせています。私は、この光景を異様に感じ、見事な「※画一さ」にいつも驚いています。もちろんスマホがだめだなどと言っているのではありません。これもまた、私たちが普段「あたりまえ」に電車に乗るための重要な※実践知と言えるのです。ただ狭い車内で、自分の立ち位置を決めた瞬間、周囲の人への関心を一斉に遮断して〝スマホバリアー〟で守られた世界へ人々が没入していく姿は私にとって、いつも驚きなのです。

かつては、新聞を四つ折り、八つ折りにして顔を近づけ無心に読む姿や週刊漫画雑誌を丸めて読む姿が中心でした。②新聞や雑誌を読む姿とスマホに没入する姿は同じなのでしょうか。それともまったく異質な日常を生きる私たちの姿ができあがっているのでしょうか。同じように見える混んだ車内の光景ですが、私はこの二つはかなり意味が異なっていると考えます。

新聞や雑誌は、確かに私たちはそれを読みたいから読むのですが、見方を変えれば、これらは、身体が触れあうぐらい混んだ狭い車内で、お互いが儀礼的に距離をとり、特別な興味や関心がないことを示し、相手に対して距離を保っていることを示す重要な道具と言えます。新聞や雑誌を読んでいても、周囲の音や隣の人の姿勢や動きなど細かい状況はわかるでしょう。その意味でこうした道具は、それに目を落としているとしても、常に周囲の他者の気配は感じ取れるし、私たちは常に周囲に気を配っているとも言えるのです。つまり、③新聞や雑誌は、自分の周囲に〝バリアー〟を張る道具ではなく、周囲の他者とつながるための道具なのです。

他方、私たちはスマホを通して、混んだ車内でもそこにいない他者と交信したりゲームを楽しんでいます。いわばスマホは、「今、ここ」で全く異質な※リアリティへ瞬時に※跳躍できる驚きのメディアなのです。さらにスマホは、新聞や雑誌に比べ、小型軽量であり、周囲に迷惑もかけずに私たちは「混んだ車内」で操作ができます。イヤホンやヘッドホンをし、周囲からの音をさえぎり、視線をスマホの画面に集中させるとき、私たちの心や関心は「今、ここ」にはないのです。端的に言えば、スマホは、それを使って多様なリアリティを自在に移動できるとしても、新聞や雑誌のように「今、ここ」で儀礼的に周囲に無関心を示したり、距離をとるための道具ではないのです。

混んだ車内の二つの光景。一つは、新聞や雑誌を読みながらも、常に周囲の他者に対して儀礼的に無関心を示し、身体が密着しているとしても、そこに安心な距離があることを示しあう秩序が「今、ここ」で作られ維持されている空間です。そして今一つは、それぞれがスマホに没入することで「今、ここ」に居ながらも、個別のリアリティの跳躍を楽しんでいる空間です。

（好井裕明『「今、ここ」から考える社会学』筑摩書房　第2章による。一部省略した箇所がある）

※画一…一様にそろっていること。すべてが同じようであること。
実践知…実践的な知識。ここでは、日常生活の中でものごとに対処し、暮らしていくための知識。
リアリティ…現実・現実感。　跳躍…とびあがること。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「私は、毎日……『驚いて』います」とあるが、筆者は何に驚いているのか。適当なものを選びなさい。

ア 狭い車内で大半の人々がスマホの画面に指を滑らせているなど、現代社会が忙しくなったこと。

イ 皆が黙々とスマホを使うほど、電車が混みあうのをあたりまえのことのように感じていること。

ウ 通勤通学ラッシュの中、車内の多くの人々がスマホの画面を眺め、周囲に対して無関心になること。

〔　　〕

(2) ——線②「新聞や雑誌を読む姿とスマホに没入する姿は同じなのでしょうか」とあるが、この問いに対する筆者の答えとして、適当なものを選びなさい。

ア 読みたいから読むものであるか、義務的に他者と交信するために眺めるものであるか、という点で異なっている。

イ 周囲に儀礼的に無関心を装うものであるか、周囲への関心が遮断されるものであるか、という点で異なっている。

ウ 狭い車内で迷惑をかけてしまうものか、周囲に迷惑をかけないものであるか、という点で異なっている。

〔　　〕

(3) ——線③「新聞や雑誌は、……道具なのです」とあるが、周囲の他者とつながるための道具であるとはどういうことか。最も適当なものを選びなさい。

ア 新聞や雑誌は相手との距離を保っていることを示す道具であるという点で、周囲に気を配るためのものだということ。

イ 新聞や雑誌は自分の関心があるものごとを知るための道具で、世界について学ぶためのものだということ。

ウ 新聞や雑誌は儀礼的に距離をとるための道具で、個別のリアリティに跳躍するものだということ。

〔　　〕